慈　恵

平成29年 夏 季 号

No.59

宗教法人 慈 恵 院　付属 多摩犬猫霊園

鑑賞

鳴鳳在樹

天啓　旦

墨気明澄、また温潤極まりない。これを観ると、八十二歳時の作にも、少し固さがあろうか。

ここには既に、気負いも衒いもなく、木雞に似て、内面から発する柔らかな威光を放つ。

花押の「旦」は、朝日を好まれたゆえにであったろう。昭和四十一年十月、遷化二カ月前の作である。

横山天啓

書道の本源を求めて、八十余年の生涯を書と禅に捧げた横山天啓翁（雪堂、昭和四十一年八十四歳で死去）は、書における墨気と境涯を重んじ、筆禅道を提唱、実践した。世に媚びることなく清貧の中で道を求めた翁の姿は〝書仙〟の趣があった。

「禅画報」より

盗人に説教する

昔、盤珪行脚の途中、江州の山田から船に乗った。船中の客は盤珪一人である。しばらくして船はとある岸辺についた。船頭は船を横づけにして、そこに山のように積んであった薪を自分の船に積みはじめた。

しかし、船頭の様子はあたりをキョロキョロし、どう見ても盗みを働いているように落ち着きがない。

「これ、船頭衆、おまえさんはその薪の代金を払うのかね」

と盤珪が鋭くいうと、船頭はギクリとしていった。

「坊主、おまえの知ったことか。黙れ」

「さては盗みなさるのかな」

「誰にもいうな」

「どうしても盗みなさるのか。盗むなら、このわしを殺してから盗られるがよい。おまえさんに盗みはさせん」

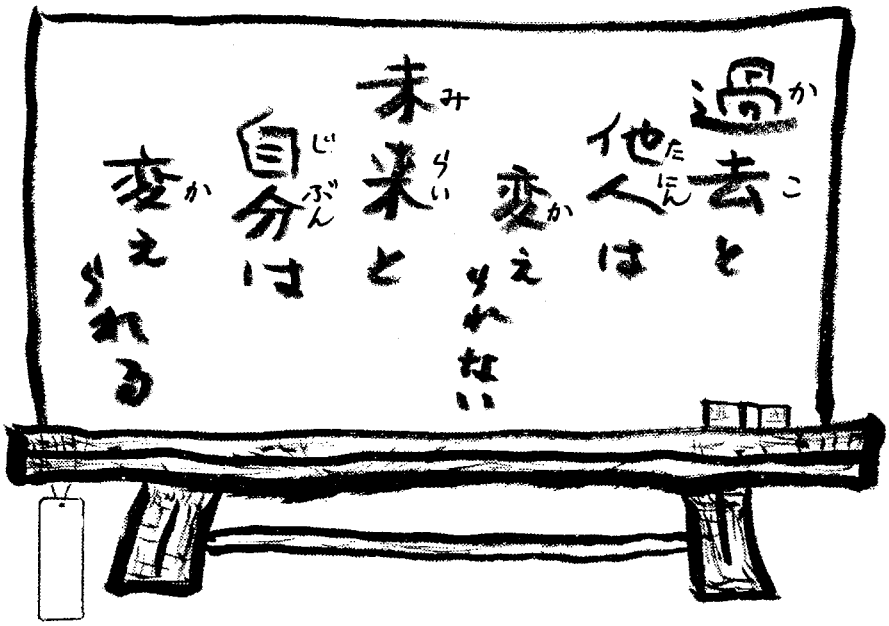
盤珪の勢いに、さすがの船頭も気押され、すっかり薪をもどし、師に心から謝罪したのだった。

「禅門逸話集成」より

盤珪永琢（一六二二～一六九三）

臨済宗。播磨の人。赤穂随鷗寺の雲甫について出家。諸方歴参ののち二十六歳で大悟、不生禅を唱導した。美濃玉龍庵、赤穂興福寺などに住した。慶安四年、長崎に道者超元が来朝すると、行ってその指導を受けた。のち伊予に遍照庵を創建、浜田の龍門寺を再興し、妙心寺に出世した。

掲示板



タマコちゃんへ
永遠（とわ）の祈り

調布市　西　敏子（66）

私がはじめてタマちゃんに出会ったのは、8年前の動物病院の待合室でした。動物病院のワンコだったあなたは、小さな体でガラス越しに外をながめていましたね。思わずピンク色の糸がつながるのを感じたママでした。

とってもやさしくて、かわいくて、わが家のまろんともすぐに仲良しになり、時々お泊りしたり、ドッグカフェに行ったり、公園でおにぎりを食べたり!!楽しい日々が始まりました。

それまでに大切な子供達を（ナナ・ノン・マロン）続けて亡くして淋しさと悲しさでいっぱいだった心に明るい光が灯りました。

あなたはパパのおふとんにもぐりこみ、まろんと同じ様に眠っていましたね。そして程なく大切な大切な心のわが子になりました。

楽しい日々が5年程続いたある日、あなたの肝臓に悪性の腫ようができていることが分かりました。その時のショックは言葉では言いあらわせません。只只回復を祈るばかりでした。

でもあなたは皆の愛と祈りで2年半もがんばって病気と闘ってくれました。タマちゃん、本当に本当にありがとう。一緒に過ごした時々何より幸せでした。

淋しいけど悲しいけど辛いけど天国で皆が待っててくれるよ。大丈夫だよ。

今は心にポッカリと穴があいて涙と悲しみがいっぱいつまっています。大切な大切なタマコちゃんいっぱいいっぱい生きる力をありがとう。ママを愛してくれてありがとう。ママもいっぱい愛してます。

いっぱいいっぱいごはんを食べて、ふかふかの雲のおふとんでゆっくり眠って下さいね。

ママより

星になった
ハクとチー

秦野市　大嶋　幸子（60）

私の可愛いチーは、毛並みが白くて小さくて、つぶらなひとみの女の子。東の空に朝陽が昇りはじめると、「チーちゃん、朝ですよ」と声をかけながらカーテンを開けていく。

朝のゴミ出しから戻ってくると、チーは前脚をそろえ、行儀よく玄関で待っている。ドアを開けて庭に出すと、朝露の降りた草花の匂いをかいで日光浴を楽しむ。

わが家には愛犬のハクと、愛猫のチーがいた。ハクとチーの名前は「千と千尋の神隠し」からいただいた。

ハクの散歩に出ると「きりっとしたワンちゃんね」「凛々しいね」と、よく声をかけられた。体重二〇kgの中型犬だが、ラブラドールくらいの大きな男の子だ。

外見の精悍なイメージとは裏腹に、ひどく甘えん坊で、仕事から帰ると玄関先でキャーンキャーンと叫びながら飛びついてくる。その様子を遠くからじっと眺めているのがチーだった。

興奮さめやらないハクに猫パンチを繰り出して牽制することもある。

チーにふかふかのキャットハウスを買ってきても自身は関心がなく、大きなハクがそれを押しつぶして誇らしげに使っていた。寒い時季にはハクの上にチーが重なり、二匹はいつも温めあっていた。

④早乙女　⑤行脚　⑥声色　（読みかたは6,7ページ）

夜になるとチーが布団にもぐってきて私と寝る。それが羨ましいのか、ハクもチャレンジするが、どうしても大きな体が布団からはみ出してしまう。すると私の袖口をくわえて左右に揺すりながら、「遊んで、遊んで」とジャレてくる。

甘ったれのハクが二〇一四年秋ごろに食欲をなくし、台車に乗せて病院へ連れていくと、点滴も立ったまま横になってくれない。散歩もできないほど弱っているのに、帰りは台車から飛び降りて歩いた。それがハクのプライドであり、十二月、吐血して他界した。

猫は気まぐれというが、決してそうではない。家族といるのが大好きだし、トイレにもついてくる。そうしてチーはハク亡き後もずっと寄り添ってくれたが、二〇一七年二月、命の炎を燃やしながら静かに息をひきとった。チーはハクのそばに旅立っていった。

不思議な猫との出会いと別れ

国分寺市　高橋　正実

年が明け、明日は大寒という寒い朝にペケが逝ってしまいました。ペケは十九か二十歳くらいの雑種の雄猫です。年末から食欲がなくなり、更に備えの水も減らなくなりました。それでもベランダの窓から外へ出て行き、そして戻るという日が数日続き、やせ細るばかりでした。

「猫は人に見られない所で死ぬ」と言われます。ペケは老猫だから家に戻らなくなる日がそろそろ来るような気がして、死んでしまうという悲しい思いは仕方のないことだと私は思うようになりました。

いつものようにペケは外から戻ってきましたが、フラフラして倒れながら歩くようになりました。

それでも二階まで階段を昇ってまでして戻ってきたペケが可愛そうで、もう寿命かと思いつつ病院へ入院させました。腎不全と診断され、体重は半分ほどに激減していました。

回復の兆しがなく、面会に行った私に獣医は「点滴続けてますが、ぐったりして反応が殆どなく、今晩にも死ぬかもしれませんね」と言われ、私は悲しい思いでペケと面会しました。

そのときペケは、私を見るなり少し起き上がって、「ニャーッ、ニャーッ、ニャーッ」と、今まで聞いたことのないとても力のこもった声で鳴いたのです。獣医は「やっぱり飼い主さんはすごいですね」と感動していました。

その後ペケは元に戻り、それから鳴き声を聞くことはありませんでした。

ペケは最後の鳴き声でいったい何を伝えたかったのだろうか？…

「ありがとう」？「家に戻りたい」？「恩返しせずにごめんなさい」？「死にたくない」？

十八年前、私は外で猫が鳴いているのが気になり外へ出たら、その猫が私に近づいてきて、まるで私に会いに来たような感じでした。可愛い顔をした人懐こい猫で、家に連れて牛乳を与えたような記憶があります。行儀がよいので飼育されている猫だろうと思い、いつ

読みにくい熟語　①反古　②未曾有　③母屋